

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

江崎文武 音楽家

Ayatake Ezaki / Musician



CREATOR INTERVIEW

No

153

江崎文武 Ayatake Ezaki

音楽家。1992年、福岡市生まれ。4歳からピアノを、7歳から作曲を学ぶ。東京藝術大学音楽学部卒業。東京大学大学院修士課程修了。WONK, millennium paradeでキーボードを務めるほか、King Gnu, Vaundy、米津玄師等、数多くのアーティスト作品にレコーディング、プロデュースで参加。映画『ホームンクルス』(2021)をはじめ劇伴音楽も手掛けるほか、音楽レーベルの主宰、芸術教育への参加など、様々な領域を自由に横断しながら活動続ける。

NO

153

江崎文武 音楽家

AYATAKE EZAKI / Musician

音楽で表現する楽しさを届ける。

クリエイターインタビュー

「ラボのようなライブベニューで、音が生まれる瞬間に立ち会う」

published_2023.12.13 / photo_tada / text_akiko miyaura

WONK や millennium parade のキーボードを務め、さらにソロアルバムリリース、音楽教育への取り組みなどポップスの領域から果敢に音楽の制作と普及に挑戦する音楽家の江崎文武さん。「MIDTOWN CHRISTMAS 2023」のインスタレーション作品《some snow scenes》では、自動演奏される楽曲の制作を担当し、第4回「ROPPONGI STREET THEATER」ではピアノ演奏を披露しました。今回は、江崎さんがよく足を運ぶという六本木のことを始め、日本と世界の音楽の違い、日本における音楽教育のあり方、そして街と音楽の関係などについてお話を伺います。

日常的に滞在している街で、自分のつくった音楽が流れる。

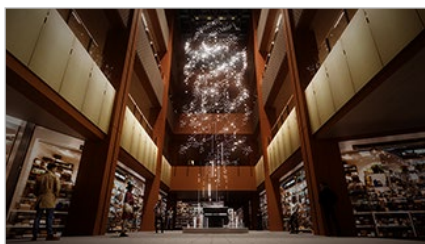
僕が上京してきたのが、今から 12 年ほど前。その頃には、六本木はすでにクリエイティブで近未来的な街というイメージでした。少し上の世代の先輩からは夜の街だとか、ポジティブでない話も聞きますが、僕らの世代からするとそういった面もありつつ、クリエイティブな要素と混ざり合っている印象です。

個人的には、音楽制作で関わる仲間が六本木エリアに住んでいたり、スタジオを構えていたりもして、昔から不思議と縁のある街なんです。自分たちで「JAZZ SUMMIT TOKYO」というイベントをやった時も、フィナーレ的な位置づけのフェスを六本木の「SuperDeluxe」という箱でやりました。また、僕の楽器庫もこの付近にあるので、そういう意味では日常的に滞在している街。だから、「MIDTOWN CHRISTMAS 2023」のインスタレーション《some snow scenes》で音楽を制作することになり、普段通っている場所に自分の音楽が流れるのは感慨深いものがありました。



JAZZ SUMMIT TOKYO

2015年3月に、江崎さんのほか、中山拓海さん、石若駿さん、ぬかたまさしさんによってスタートしたプロジェクト（現在は中山さんが中心となって運営）。ジャズミュージシャンの交流の場としてジャズフェスやイベント、ジャズシーンや若者へのジャズ教育をサポートするクラウドファンディング、動画配信サービスなどを行っている。



《some snow scenes》

ガレリアの吹き抜けに登場した、冬の繊細な情景を切り取ったインスタレーション。氷柱のようなクリスタルからこぼれ落ちた、光の滴がピアノの鍵盤を叩き、江崎さんが作曲した音楽が自動演奏される。ビジュアルデザインスタジオWOWによる演出と、江崎さんの楽曲の美しいコラボレーションが実現した。15分ごとに、4種類の特別演出が行われる。2023年11月16日（木）～12月25日（月）開催。

Design : WOW

Music : 江崎文武

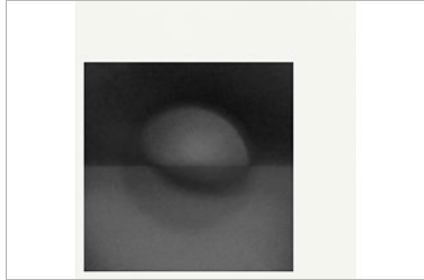
https://6mirai.tokyo-midtown.com/event/some_snow_scenes/

《some snow scenes》は吹き抜けを生かしたインスタレーション作品。僕はそこで流れる15分ごとに行われる特別演出のための約60分の曲を制作しています。展示場所となる東京ミッドタウンはよく知っている場所だからこそ、どういう人たちがいるのか、どんな雰囲気なのかということを想像しやすい部分はありました。

今回のテーマは雪や雨。1か月以上の間、毎日館内に流れ続けても飽きないで、感情揺さぶるような音楽をつくりたいと思っていました。完成した作品は、こぼれ落ちた光の滴が、下に置かれた自動演奏ピアノの鍵盤を叩き、音楽を奏でるという演出。物理的に楽器が動いて音を出すので、ピアノだけで雨や雪をどう表現できるか、すぐ考えました。結果、60分間で4パターンの特別演出を吹雪や深々と降る雪など、それぞれにテーマを設けて、自分の中で

日本的な価値を伝えるソロプロジェクト。

テーマを元につくる「標題音楽」が結構好きで、ビジュアルやイメージを見ながら作曲することも多いんです。今回も自分の好きな東山魁夷が描いた雪景色や、記憶に残っている雨の描写の浮世絵を思い浮かべながらつくったりもしました。ソロアルバム『はじまりの夜』は、谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』に着想を得て制作したのですが、僕は幼い頃から日本の文化、世界観が好きで、初めてつくったプラモデルも、お城だったんです（笑）。小学生の時は、クリスマスにからくり人形をサンタにねだったり、卒業制作では葛飾北斎の模写をしたりしました。



はじまりの夜

全曲の演奏はもちろん、作曲・編曲もすべて江崎さん自ら担当した1stアルバム。谷崎潤一郎の随筆『陰翳礼讃』からインスピレーションを受け、「日没から朝日を迎えるまでのとある一夜、影と光」を音で描いた。Sweet William、角銅真実、松丸契、荒井良二、手島葵、mei ehara、木原健児などジャンルレスな7組のアーティストが参加している。

上京してからは周りの影響で、英語の歌詞の音楽をやる機会が増えましたが、それは欧米に出ていくことを想定した時、受け入れられやすいフォーマットだから。でも、活動する中で、日本の良さに目を向けることも、とても大事だと感じるようになったんです。

以前、宮崎駿さんがおっしゃっていた「最もナショナルなものこそ、インターナショナルなものになり得る」という言葉に、すごく感銘を受けて。「そうか。自分の国で大切にされてきたことを徹底的に伝えていく方が、外から見た時に面白いんじゃないか」と。そして、グローバルのフォーマットに寄せてつくることも、すごく日本的な価値観でつくることも、どちらもやってみようと思ったのがソロプロジェクトです。

日本から世界に衝撃を与える音楽をつくる。

国際化の話で言うと、日本のアーティストは欧米から見出されたり、アニメーションなど他ジャンルとのコラボレーションを通じて、ワールドワイドに認知されてきた面はあります。最近ではたまたま SNS でバズって海外に出ていくこともありますけど、多くはないですね。

その中でも、ファッションや建築、美術の分野では、世界的に活躍されている日本人がたくさんいらっしゃいます。一方、音楽の分野では、もちろん坂本九さんや坂本龍一さんのような方もいらっしゃいますが、人数的には限られています。つまり、「一枚の布」で世界のファッションに切り込んでいった ISSEY MIYAKE や、COMME des GARCONS、Yohji Yamamoto が起こした「黒の衝撃」みたいなことが、音楽界ではまだ起こせていないということ。裏を返せば、日本の音楽家にはまだまだやれることがたくさんあるということで、その一員として頑張らなきゃいけないなと強く感じます。



江崎文武 音楽家

AYATAKE EZAKI / Musician

published_2023.12.13 / photo_tada / text_akiko miyaura

僕は仕事の関係で10代の子たちと接する機会も多いのですが、若い世代の中には日本のアーティストの音楽をまったく聴かないという人もいます。代わりに、韓国の文化がいろんな基準になっていたりする。欧米のメインストリームでアジア人が戦えているという点に関して素直にすごいなと思いますが、その国らしさで戦うという点ではもっと他にやり方がある気がします。

歌と歌詞だけが音楽じゃない。聴く力を変えることが必要。

《some snow scenes》の曲をつくっている時にも感じたのですが、“空間 × 音楽”の領域において、日本はかなりの先駆者だと思うんです。表参道の「SPIRAL」ができた時には館内の音楽を尾島由郎さんがつくられましたし、地下鉄や山手線には駅ごとに発車メロディーがある。すごく面白い工夫をしているけど、それが音楽をじっくり聴くとか、音に対して敏感だ、という点にあまり結びついていない。日本の聴き手の意識が変われば、日本の音楽が外に出ていける力にもなると思うんです。そういう意味で、日本人の聴く力を変えていくことはすごく大切。やっぱりコンテンツとして、「これは面白い」「こういう豊かな音がある」とみんなが感じて育てないと、世界には持っていけないんじゃないかな。



UNE COLLECTION DES CHÂINONS I : MUSIC FOR SPIRAL

複合文化施設SPIRALの館内音楽として制作された尾島由郎氏による環境音楽集。1988年リリース。近年80年～90年代の日本の環境音楽が注目されており、同アルバムは2019年にリイシューされた。

じゃあ、聴く力を変えるためにできることは何か。ひとつはすごくシンプルで、歌だけを聞くのをやめることだと思います。特に日本においては、驚くほど歌と歌詞しか聴かれていないのが現実。「唱歌教育を中心とする」と定められた教育のシステム上、致し方ないことではあるし、みんなにあてはまることではないけれど、実際社会で起こっていることとしても、データの的にもそういう傾向があることは明らかです。

リズムや音色だったり、楽器のリフだったり、歌ほど重視されない。だから、「この楽曲、展開の構造が面白いよね」みたいな会話にはなかなか辿り着かない。でも、アートやファッション、建築の分野では、そういう次元の話をしてる人も多いじゃないですか。音楽も、歌と歌詞だけがすべてではないと知れ渡って、「先にサビから始まって、途中でまさかのBメロがなくて」みたいな話がお茶の間で飛び交うようになったら、もっと面白い展開になると思います。

加速するメディア環境で、時間をかけて楽しむ体験を。

メディア環境について考えると、音楽が立ち入る際は増えています。でもその分、純粋に音楽を楽しむ時間がすごく薄まっている気がするんです。TikTokなりInstagramなりが発信の軸になったことで、どんどん曲の尺が短くなり、サビの10秒だけしか知らない、みたいなことが当たり前になっています。

それはそれで10年後、20年後に「ああいう時代もあったよね」と面白く話せるのかも知れないけれど、時間芸術をやる者としては、やっぱり面白くはないな、と。結局、15秒で心をつかむような、コマーシャル音楽的なアプローチをみんなが意識してるわけじゃないですか。もう少し時間をかけて音を楽しめるといいんだけど、と思ったりはしますね。すでに年寄りの発想なのかもしれませんが（笑）。

一方で、刹那的なものに対して抗う動きも出てきていますよね。例えば、「写ルンです」が流行ったり、レコードの生産量がめちゃくちゃ増えたり、コーヒー1杯1杯を丁寧に淹れるお店が流行ったり。時間かけて何か楽しもうよ、ということが、一定のカウンターカルチャーとして存在する。そのカウンター側とメインストリーム側のバランスが、もう少し取れるといいんだろうなと思いますね。



published_2023.12.13 / photo_tada / text_akiko miyaura

音楽で表現する楽しみを学ばないまま終わる教育。

日本の音楽教育のあり方は、ここ100年ちょっとの間、大きくは変わってないんです。ピアノと歌を軸にして音楽を学びましょう、リコーダーをみんなで練習しましょう、合唱コンクールで頑張って歌いましょう、といった構造はずっと同じ。多くの人が自分ならではの音・音楽で表現する楽しみを知らないまま学校を卒業していく。それは公教育のもっとも大きな問題だと感じています。

唱歌中心の音楽教育が奏功して日本はカラオケが根付いていて、着うたの文化の発達も早かった。そう考えると、「自分はこうです」とアイデンティティを音で示すことが、すごく好きな国民ですね。風鈴や鹿威し（ししおどし）の文化からも分かるように、音に関する感受性も強いはず。ただ、自分だけの音や音楽を生み出して楽しむことはあまり得意でない。

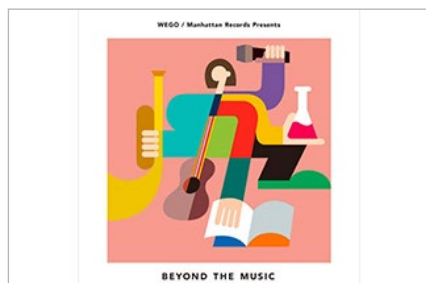
僕の知人に、イギリスのパブリックスクールで育った人がいるんですが、高校3年生の時に音楽の授業で自分の曲をつくるまでやったそうで。「当時は何も分からず辛かったけど、大人になってみると歌だけじゃなく、楽器もよく聴く耳になっていた」という話をしていたんです。それを聞いた時、「だから、あの国は Radiohead だとか尖ったバンドが、国民的な人気を博しているんだな」とすごく納得しました。

僕が思う音楽の一番面白い部分は、自分で音を見出したり生み出したり、曲をつくったりすること。でも、日本の音楽の授業だとそんな経験はほぼなくて。美術の授業だと技法だけを知って終わるなんてことはなくて、手を動かして絵を描くじゃないですか。でも、音楽はそうじゃない。それでは表現する術を習得できるはずもなく、大人になってカラオケに行くぐらいのことしかできなくなってしまう。

テクノロジーで曲を生み出す経験は、ポジティブでしかない。

そんな教育のあり方を変えるために、昨今のテクノロジーの発達にはメリットがあると感じています。パソコンなりAIなりを使って、曲を生み出す体験を若いうちしておくのは、すごくポジティブに働くだろうな、と。かつ、ツールが発達するほど表現が多彩になっていく。例えば、手紙で思いを伝える時に、挿絵を入れる人がいるじゃないですか。もし簡単に音楽をつくることができれば、思いを乗せた曲をつくって人に伝えとか、今すごく怒りが沸き上がっているから怒っている曲をつくった、みたいなこともできる。それくらい身近な表現のひとつとして、音表現がたくさん起こっていくといいなと思います。

僕がクリエイティブスクール「GAKU」で、10代に向けてやっている授業「Beyond the Music」もそのための第一歩。音楽を通してさまざまな分野のことを学びながら、実際に楽曲を制作してもらっています。また、11月にはApple表参道でワークショップを開いて、参加者たちとiPadで曲をつくりました。僕は研究者でも教育者でもなく、ただただバンドやポップスの領域で活動している人間なので、「こういう世の中になったらいいな」ということを発信することしかできない。でも、活動が続けていると教育や研究の現場、あるいは学校のカリキュラムを考える文部科学省の人たちに、だんだんと届いている実感があります。



Beyond the Music

「GAKU」は10代のための新たなクリエイティブな学び舎として2020年に開講。山縣良和

(writtenafterwards) がディレクターを務める。その中のひとつのクラス「Beyond the Music」は、江崎さんが総合ディレクションを手掛け、実際に教壇にも立っている。2023年8月～翌年2月は第3期として開催中。10代に向けた新たな音楽教育の発信を目指し、生徒たちは実際に楽曲づくりに挑戦している。



江崎文武と一緒にiPadとGarageBandで音楽をつくろう

2023年11月にApple 表参道で行われたワークショップ。iPadとGarageBandを使って、サンプリングした音からトラックを組み立てていく方法を江崎さんが手ほどきした。参加者は、GarageBandのLive Loopsで「眠る時の音楽」をテーマに曲づくり。出来あがった曲をそれぞれが披露した際には、江崎さんが即興でピアノを演奏する場面もあったそう。



江崎文武 音楽家
AYATAKE EZAKI / Musician

published_2023.12.13 / photo_tada / text_akiko miyaura

先日、小中学校の音楽の先生が集まる学会で、講演をする機会をいただきました。そういう場で「ポップスの現場の音楽家でも全然ピアノが弾けない人、まったく楽譜が読めない人はいっぱいいるけど、表現することを楽しんでいますよ」と伝えることが、やがて教育の形を変えていく一歩になるのかなと思っています。

最終的には、公教育が変わってほしいというのが一番の願い。「型」を教える教育ではなく、歌が好きな人は歌をやればいい、ビートを組みたい人はビートを組み、DJ をやりたい人はDJ をやっていい、といったように「表現」を軸とした音楽教育が実現できるまで、自分が動けることはいろいろやっていこうと思っています。

何かが生まれる瞬間を創出することが、未来の価値になっていく。

音楽教育の話をしてきましたが、街づくりにおいては音楽が立ち入る隙ってあまりないんですよ。コンサートホールをつくるとか、ライブの便宜を図るくらいのことしかできなくて。六本木を例に挙げると、「Billboard Live TOKYO」はある程度まで磨き上げられたアーティストたちのショーケース。一方で、「21_21 DESIGN SIGHT」は何かのプロセスを見せたり、巨匠と新進気鋭のデザイナーとが同じ展示会に並んでいたりするじゃないですか。音楽の世界でも、もっと何かが生まれる瞬間を見せる場所や、エネルギーはあるけどセールスにはつながない若い人たちの受け皿みたいなものがあると、六本木はより面白い街になるんだろうなと思います。

まさに、僕らにとって「SuperDeluxe」はそういう場所でもありました。真っ白な壁がドカンとある無機質な箱で、コンテンポラリーダンサーの公演もあれば、プロジェクションマッピングを始めたばかりというチームの発表会もある。芽を出したばかりの人たちが集まっている、そんな場所でしたね。



SuperDeluxe

実験音楽やフリージャズ、電子音楽を中心に多種多様なアーティストが出演。有名・無名、国内・国外を問わず、先鋭的で実験的なパフォーマンスを展開する唯一無二の拠点として、多くの人から支持を得た。2019年にビルの老朽化により閉店したが、2022年に西麻布から千葉・鴨川に場所を移し、再始動した。

何かが生まれる瞬間に立ち会う機会をどう創出できるかが、すごく重要だと思います。例えば、音を出す環境が整っているオープンな場や、安く使える音楽家のラボみたいなものをつくったり、取り壊しが決まっている雑居ビルを簡易的なライブベニューとして稼働させたりできると、機会ができていくのかな、と。そういった場で、接点がないはずの人たちがこの企画だから一緒にやりたいな組み合わせの妙が生まれると、さらにいいですね。きっと大きなお金にはならないけど、将来的にビッグアーティストが生まれた時、「10年前、六本木のあの箱でやらせてもらったのが、今につながっている」となっていく。それ自体が、価値だと思います。

経済合理性だけではない余白を残す。

最近の東京は、経済合理性に偏りすぎているイメージがあります。同じような超高層ビルが建って、同じようなテナントが入って、飲食店も蓋を開けたら同じ傘下のグループだった、ということが起きている。そういった再開発によって失われるものって、資本的な面と整合性が取れないものなんですよ。だから、昔からあった街中華がなくなったり、古いライブハウスがなくなったりといった皺寄せを受けて、代わりに経済的に成功した人が使うベニューができていく。でも実際のところ、経済的に豊かとは言えない人たちこそが、すごく面白いことを考えていたりするじゃないですか。そう思うと、合理性を優先した再開発って、本当に豊かなんだろうかと思う時もあります。

もちろん経済的に成功すること、ビジネスが回ることは大事だから、ちゃんと考えなきゃいけない。それに僕自身、再開発自体は嫌いじゃないんです。この間パリに行った時に、延々と同じ街並みが保たれているのを見て、すごくカッコいいけど、これはこれでつまらないかなとも思っちゃったんですよ。街の新陳代謝みたいなものは東京の魅力のひとつだし、新しい建築が生まれるためには必要なこと。だから、すべてに反対するわけじゃない。ただ、経済合理性だけで回っていない余白を残すことは、忘れずにいてほしいなと思いますね。

撮影場所：

MIDTOWN CHRISTMAS 2023 《some snow scenes》(2023年11月16日～12月25日)

取材を終えて

たぐいまれな音楽センスを持ちながら、冷静に今の日本の音楽シーンを俯瞰している江崎さん。日本の音楽教育は技法だけを知って実践を伴わないこと、多くの日本人が歌と歌詞だけに耳を傾ける偏った聴き方など、“言われてみれば”とハッとすることが多々ありました。でも、何より心打たれたのは、「表現」を軸とした音楽教育の実現に向けて動き続けようとする行動力。遠くはない将来、江崎さんの活動が、若者たちに音楽表現の楽しさを広げてくれるはずだとワクワクしました。(text_akiko miyaura)